

景観マガジン埼玉スタイル

S.Style no.12

A photograph of a man with dark hair, wearing a blue zip-up jacket with a white Under Armour logo on the chest. He is standing outdoors in front of a body of water. The background is filled with tall trees with vibrant orange and yellow autumn foliage under a clear blue sky. The water in the foreground is calm and reflects the surrounding trees.

**TAKURO
TAJIMA**

インタビュー 田島 拓朗さん



羽生水郷公園 水生植物園のメタセコイアと木道散策路

我が国の都市公園制度は、1873年（明治6年）の公園開設に関する政府の太政官布達をもってその始まりとされています。埼玉県では1885年（明治18年）に氷川公園（現在の大宮公園）が開園され、現在ある県営公園のなかでは最も古い歴史をもっています。

都市公園は、埼玉県景観アクションプランの中で「水と緑のつながり景観資源」として位置付けられ、埼玉県には多くの特色のある公園があります。今回の舞台となる羽生水郷公園は、「身近な水辺の生物と人との共生」をテーマとした文化教養型レクリエーション拠点として、1981年（昭和56年）に埼玉県羽生市に開設されました。

1983年には公園内に「遊びの中で自然を学ぶ」をテーマに県内に棲む淡水魚や水生昆虫を中心に展示する「さいたま水族館」が開設され、公園に隣接する国指定天然記念物であるムジナモ（食虫植物）自生地」とともに県民に親しまれています。（出典：埼玉県 HP）

今回は、公園を管理している公益財団法人埼玉県公園緑地協会羽生水郷公園管理事務所に勤務している田島拓朗さんにインタビュー。

田島さんは、大学で樹木学、植栽学を学ぶと同時に実際に「つくる・維持する」技術も習得するなど、造園学に特化した学生時代を経て、その経験をすぐに活かせる仕事に就かれ、今に至ります。

常日頃、実際のフィールドで公園利用者からの意見に耳を傾け、公園の美しい景観創出に努め、今年度は、水族館のナイト営業期間に合わせたヒマワリのライトアップイベントを企画・実施し、開花時期を調整しながら見事に「夜のヒマワリ」を咲かせた、造園のスペシャリストが、今考えていることとは…



人気の撮影スポット さいたま水族館入口のラッピングカー

〈埼玉スタジアムでサッカーを観戦し、グラウンドキーパーに憧れ、将来の進路を決定〉

■公益財団法人埼玉県公園緑地協会へ就職された動機、きっかけなどを教えてください。

■私は小さい頃からサッカーに親しみ、埼玉スタジアムに足を運んでJリーグ・浦和レッズの試合を何度も観戦してきました。その中で、選手だけでなく、ハーフタイムにピッチを整備するグラウンドキーパーの存在を初めて意識しました。実際にその姿を目にし、「試合は選手だけでなく、最高の環境を整える人たちによって支えられているのだ」と強く感じました。

選手としてピッチに立つことはできなくても、最高の試合環境を整えることで、選手のパフォーマンスを支えるグラウンドキーパーの仕事に憧れを持つようになり、将来その仕事に携わる可能性を広げたいと考え、東京農業大学に進学いたしました。

大学生活を送る中で、先輩から埼玉スタジアムを管理している埼玉県公園緑地協会の存在を教えてくださいました。幼い頃から通い続けたあのスタジアムを支える組織があることを知り、「ぜひここで働きたい」という思いが明確になりました。

採用時にはグラウンドキーパーの募集はありませんでしたが、それでもまずは埼玉スタジアムの運営に携わりたいという一心で入社しました。

■ そうだったのですね！ サッカーの試合を見てサッカー選手になりたいと思う子供はたくさんいると思いますが、そこでグラウンドキーパーになりたい、と思うのは驚きです。

■ そうですね。自分でも少し変わっているな、とは思いますが（笑）。

ただ、振り返ってみると、もともと実家の周囲は山や田んぼに囲まれた、緑の多い環境でした。祖父が芝生や盆栽、庭木の手入れをしている姿を間近で見たり育ち、田んぼでの稲作や畑での野菜づくりも、植物を育てることが身近にある日常の風景でした。

そうした環境で育ったこともあり、はっきりとした職業イメージはなくても、「将来は緑に関わる仕事がしたい」という思いは、小さい頃から漠然と心の中にあっただように思います。

そんな中でグラウンドキーパーの仕事を知り、「この仕事に就くためにはどうしたらいいのだろう」と、自然と考えるようになりました。夏でも冬でも、いつ訪れても美しい芝生が保たれている埼玉スタジアムを見て、「いったいどうやって、この芝生は育てられているのだろう」と強く興味を持つようになったのを覚えています。



社会人になってからも行った葉っぱテスト

〈大学の造園科学科で樹木学、造園学を学び、伝統的な造園技術も習得〉

■ 大学では何を学ばれていましたか？

■ 大学では、樹木を葉や樹形から見分ける樹木学を基礎に、植栽の配置計画や剪定方法など、植物の特性を生かした植栽学を学びました。所属していたのは造園科学科で、都市景観に携わりたい人もいれば、家業が造園会社で、そのために学んでいる人もいるなど、さまざまな思いを持った仲間が集まっていました。

また、当時の時代背景もあったのだと思いますが、授業や課題では「何かを創ること」に主眼が置かれていたように感じています。

一方で、現在はすでに出来上がった施設や空間が多く、新たに「創る」ことよりも、それらをいかに「運営するか」「維持管理していくか」という流れに変わってきていると感じています。



水面に映る木々が美しい、川越公園（愛称：ホットスタッフ川越パーク）

■大学時代、特に印象に残っていることはありますか？

■大学では、木を葉や樹形から見分ける樹木学を基礎に、植栽の配置計画や剪定方法など、植物の特性を生かした植栽学を学びました。また、造園設計に欠かせない測量や製図の基礎として、公園や緑地を題材にした造園計画・設計の演習にも取り組みました。

演習では、コンセプトづくりからデザイン、図面作成、プレゼンテーションまで、一連のプロセスを経験しました。東京農業大学の教員だけでなく、外部の先生方から評価や講評をいただく機会もあり、その経験は今でも仕事の中で役立っていると感じています。

さらに、実際に造園の職人さんが行うような、竹垣づくりなどの伝統的な技術演習も経験しました。図面だけでなく、実際に「つくる・維持する」の両方の視点を大切に学べたのは、とても印象に残っています。造園学に特化した学生生活を送ることができたのは、本当に恵まれた環境だったと思います。

また、指定管理制度について学ぶ機会や、芝生そのものを専門的に学ぶ授業もありました。特に、スポーツターフと呼ばれる、実際にサッカースタジアムで使用される芝生、例えばティフトン種を育成したことは、強く記憶に残っています。

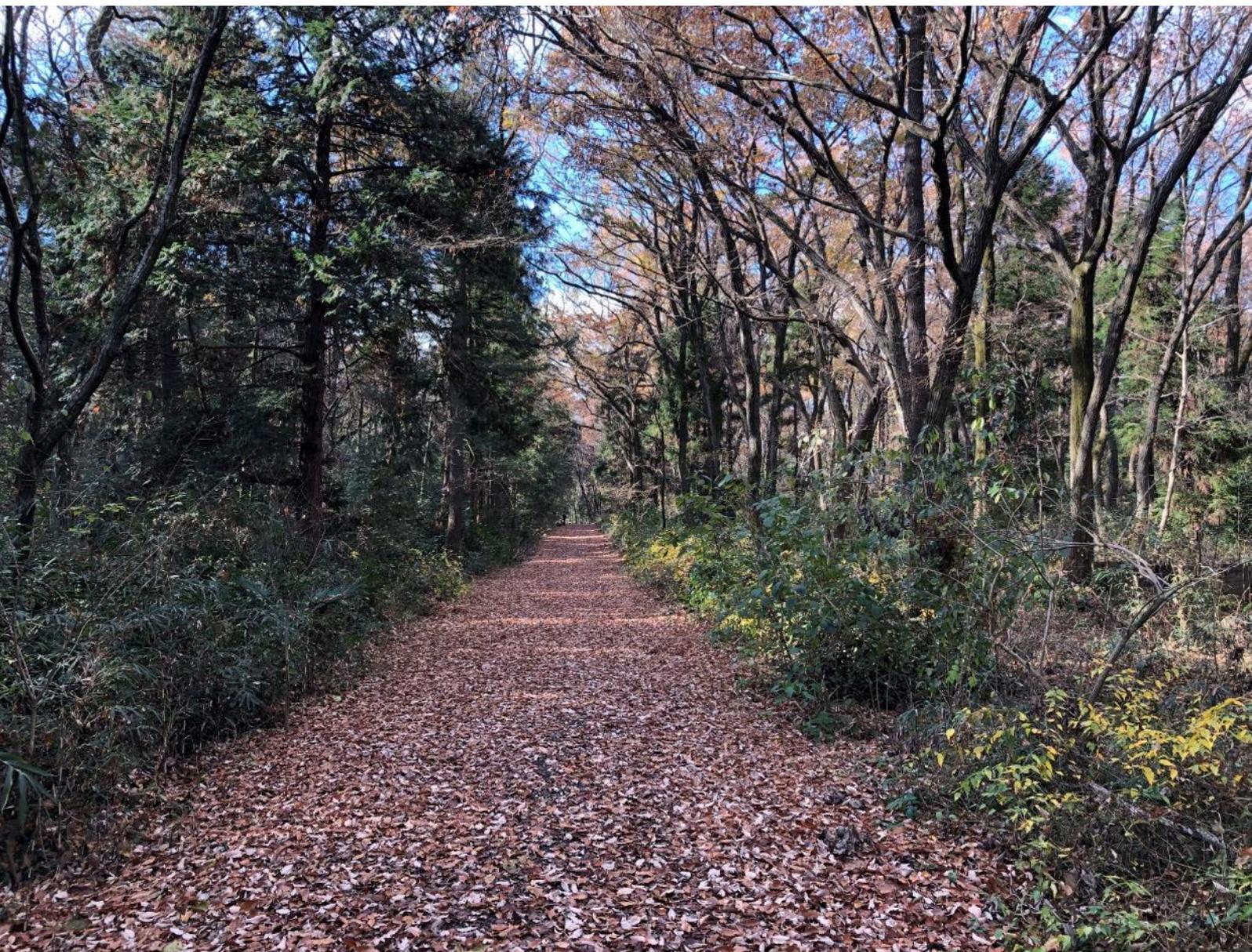
今振り返ると、確かに将来の仕事を意識して勉強や研究をしていたような気がします。

■素晴らしいです！もう尊敬しかないです！

■いえいえ、そんなことはないのですが（笑）。ただ、大学で学んだことは、ほぼすべて現在の業務に活かせていると感じているのは事実です。樹木や植栽に関する知識、職人さんと一緒に現場で取り組む際の考え方や計画の立て方など、実務に携わる中で、知識の大切さを改めて実感する場面が多くあります。

その一方で、今になって「もっとしっかり勉強しておけばよかった」と思うことも正直あります。大学では「景観論」や「植栽基盤」に関する授業も受けていましたが、実際の業務に触れることで、当時とはまた違った視点で理解できるようになったと感じています。

現在は、日々の業務を通じて、もう一度自分なりに「学び直し」を行いながら、知識や理解を深めつつ仕事に取り組んでいるところです。



落ち葉の残る雑木林（智光山公園）



埼玉県熊谷市の元荒川源流部にのみ生息する「ムサシトミヨ」(写真提供：埼玉県公園緑地協会)

〈最初の赴任地は川越公園。その後、智光山公園、本部技術部、そして羽生水郷公園へ〉

■埼玉県公園緑地協会に就職以来、どのような仕事をされてきたのか、教えてください。

■最初は、プールを併設する川越公園管理事務所に配属されました。プールの運営・維持管理を中心に、総務的な業務から園地管理まで、幅広い仕事に携わりました。

その後、入職2年目で異動となり、当協会が管理する狭山市の智光山公園管理事務所に赴任しました。智光山公園では、総務、経理、修繕に加え、園地や菖蒲田の管理など、公園を維持していくための、ほぼすべての業務を経験させていただきました。ここでの3年間は、本当に多くのことを学んだ時間でした。

智光山公園は、都市公園でありながら雑木林など自然の地形を活かし、その中に動物園、植物園、釣り場、体育施設が配置された公園です。そうした環境の中で、公園管理の基礎から応用まで、「公園のイロハ」を一通り経験することができたことは、今でも自分にとって大きな財産になっています。

5年目には、本部の技術部に配属されました。そこでは、当協会が管理する各公園の管理事務所から寄せられる技術的な相談への対応や、修繕に関する個別の助言、全公園共通の技術的基準の周知、園地管理に使用する機械の導入検討などを担当しました。

技術部には、園地分野だけでなく、建築、設備、電気といった専門分野の職員も在籍しており、各公園で技術的なトラブルが発生した際には、現地に同行して対応しました。その4年間は、本当に勉強になることばかりでした。

その後、羽生水郷公園管理事務所に配属され、現在は2年目になります。

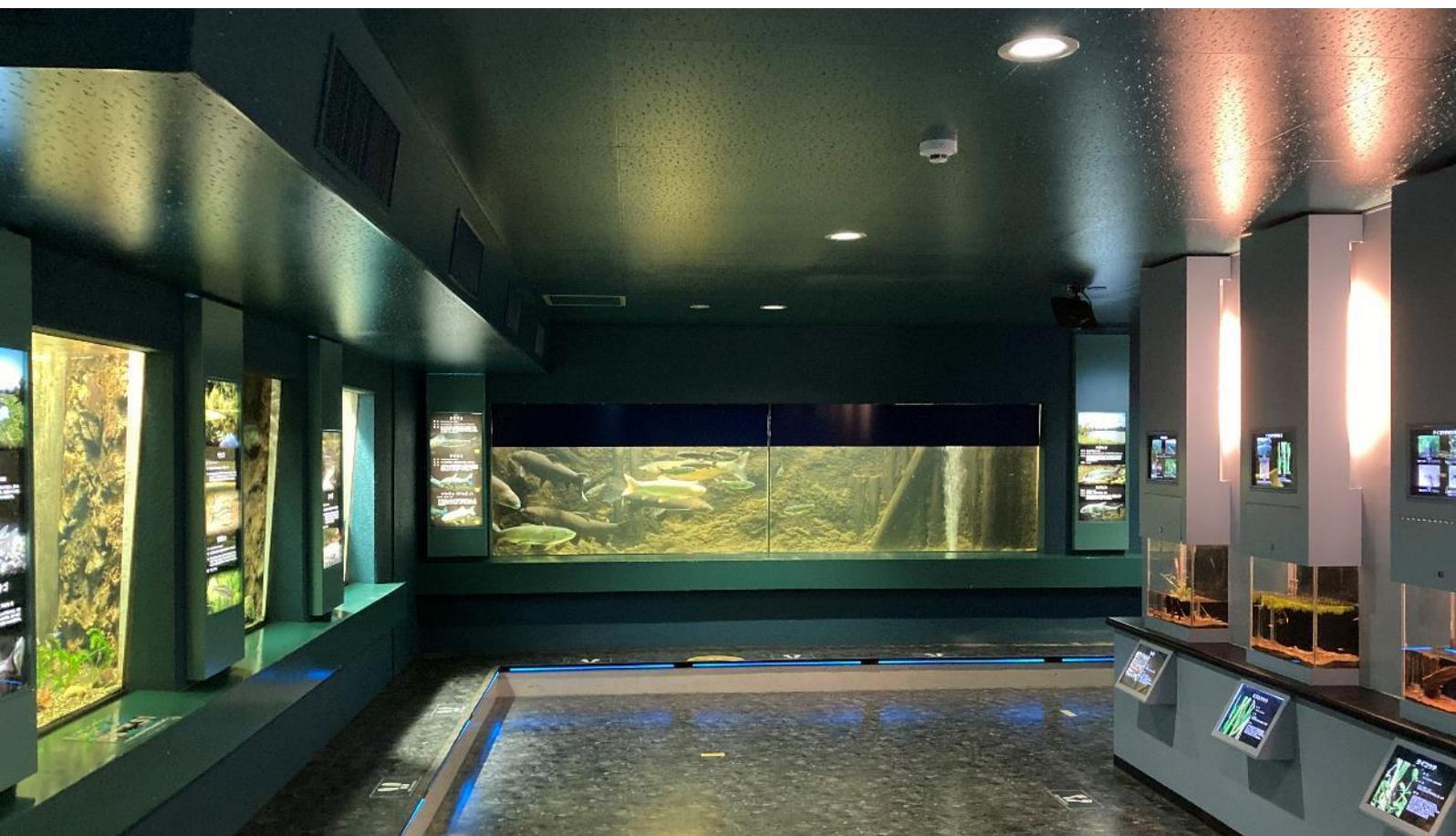
■本部の技術部に4年間在籍されたとのことですが、いかがでしたか？

■そうですね。それまで公園の管理事務所では、公園利用者の方や、管理を委託している事業者の方とのやり取りが中心でしたが、技術部では、当協会が管理するすべての公園の管理事務所の担当者とのやり取りが中心になりました。立場が大きく変わったと感じましたね。

自分自身、管理事務所の忙しさはよく分かっていたので、本部の技術部に異動してからは、なるべく現場の業務に支障が出ないように、お願いする内容やタイミングを慎重に考えるようにしていました。ただ、そのバランスが最初はとても難しく、1~2年目はかなり苦勞した記憶があります。

技術部3年目以降になると、少しずつ余裕も生まれ、仕事がしやすくなってきました。最初は遠慮があったのかもしれませんが、「現場を知っている本部の立場として、自分ができるアドバイスをしよう」と意識を切り替えるようになりました。その結果、管理事務所の方々の仕事が少しでも進めやすくなり、最終的に公園利用者の方の満足度向上につながればいい、という思いで仕事と向き合っていました。

改めて振り返ると、本部に来る前に、川越公園や智光山公園で実際の公園管理の現場を経験できていたことは、本当に大きかったと今でも感じています。



展示水槽が映える館内照明（さいたま水族館）

■一番印象に残った仕事を教えてください。また、なぜ印象に残っているか教えてください。

■羽生水郷公園には大きな花修景広場があり、私が赴任した昨年度は、ヒマワリやコスモスを咲かせる取り組みを行ってまいりました。結果としてうまくいったこともあり、今年度はさらに一步踏み込んだことに挑戦したいと考え、ヒマワリのライトアップを企画・実施しました。最近の業務の中では、特に印象に残っている取り組みです。

初めての企画だったため分からないことも多くありましたが、園地作業班の協力を得ながら準備を進め、無事に実施することができました。

水族館では8月のお盆時期にナイト営業が行われるため、その開催日に合わせてヒマワリを开花させることを目標にしました。日程が決まっているイベントに合わせて开花させる必要があったため、逆算して作業内容やスケジュールを組み立て、开花までの管理に注力しました。

开花時期の調整には細心の注意を払いましたが、天候など自分ではコントロールできない要素も多く、正直かなり不安な日々を過ごしました。それでも、予定していた日程でヒマワリを咲かせることができ、多くの来園者の方に足を運んでいただき、楽しんでいただけたことは本当にうれしかったです。

来園者の皆さんの反応を実際に目にしたときは、大きな達成感があり、この仕事のやりがいを改めて感じました。



ライトアップされた幻想的な「夜のヒマワリ」（羽生水郷公園）

■夜のヒマワリ、素敵ですね！

■ありがとうございます。実は、開花時期の調整が難しく、生育状況としては、背の低いものと高いものが混在する形になってしまいました。ただ、その高低差が結果的にライトアップには効果的に働き、奥行きのある、幻想的な景観を生み出すことができました。来園者の方からも好評をいただき、とても印象に残っています。

昨年度は、水族館のナイト営業時に行列ができることはほとんどなかったのですが、今年度はヒマワリのライトアップを実施したことで、水族館前から北駐車場へ続くプロムナード、さらには円形花壇付近まで行列ができました。その光景を目にしたときは、正直とても驚きましたし、同時に胸がいっぱいになるほどの達成感を感じました。

今回のイベントでは、ライトアップ機器の手配から工程管理、案内看板の作成、広報まで、すべて自分で担当させていただきました。大変な部分もありましたが、その分、結果がしっかりと形になり、非常に充実した取り組みになったと感じています。改めて、ご協力いただいた関係者の皆さまには、心から感謝しています。

〈日本造園学会に入会、自ら学び直し、リスクリングの日々。〉

業務にフィードバックし、組織で共有している〉

■田島さんは、日々、奮闘されていますが、先ほど「学び直し」というお話がありました。

最近では、リスクリングとも言われていますが、具体的にはどのようなことをされていますか？

■はい。ちょうど本部技術部時代に、職場で日本造園学会に入会している方からお話を聞いて、興味を持ったのがきっかけで入会しました。学会からは定期的に学会紙が送られてきて、現在の「造園」に関する最新研究や情報が多数掲載されています。それらを読むことで、今の業務だけではなく、どのような方向に進んでいくべきかについても、自分なりに考える機会が増え、学会に入って本当に良かったと感じています。

最近では、大学時代の同級生が行っている講義をオンラインで聴講することもあり、大いに刺激を受けています。造園学会に入会して以降、自分から積極的に学び、情報にアクセスする姿勢が身についたと感じています。

また、学会誌の中で「間伐によって生態系や景観を向上させる」といった内容の記事を目にしたことをきっかけに、その情報を事務所の園地担当者と共有するなど、学んだことを業務にフィードバックするよう心がけています。自分一人の学びで終わらせるので

はなく、組織全体に広げていくことも大切だと考えています。

技術部時代に、部内でさまざまな情報を共有してもらった経験があったからこそ、今度は自分が得た知識や情報を、周囲に還元できる存在でありたいと思い、日々取り組んでいます。



来場者を楽しませる水上花壇（羽生水郷公園）

〈日頃からの公園利用者とのコミュニケーションが大切〉

■田島さんは、日ごろ、公園利用者、事業者、関係団体など、多様な主体とどのように関わっていらっしゃるのか教えてください。

■一番大切にしているのは、公園利用者の安全を確保することです。その上で、利用者の方からいただくご意見にしっかり耳を傾け、必要な対応を迅速に行うことを心がけています。

また、施設の修繕や維持管理に関わる事業者の方、イベントに関係する方、行政や関係団体など、さまざまな立場の方と連携しながら業務を進めています。それぞれ目的や立場が異なるため、相手の意向を丁寧に把握した上で、正確で分かりやすい説明を行うことを常に意識しています。

現場の状況を踏まえた調整を行うことで、公園利用者の安全・安心を確保するとともに、円滑な公園運営につなげられるよう努めています。

日ごろから職員による園内点検は行っていますが、実は、公園を利用されている方から教えていただく気づきも多くあります。時には厳しいご意見をいただくこともありますが、毎日散歩をされている利用者の方から管理状況についてお褒めの言葉をいただくと、とても励みになります。こうしたやり取りを通じて、コミュニケーションの大切さを日々実感しています。



人気のグッズが揃う、さいたま水族館の売店前にて

のため、できるだけ事務所から外に出て、積極的に利用者の方へご挨拶をし、会話を交わすよう心がけています。

また、管理者としての視点だけでなく、利用者の目線に立って公園を見ることを意識しながら、日々の業務に取り組んでいます。

■公園利用者の方から、具体的にどのような情報を頂けるのですか？

■はい、例えば、公園内の樹木で枯れている枝を教えていただいたり、落とし物を届けていただいたりすることがあります。

日頃から職員による点検は行っていますが、利用者の方からリアルタイムで情報をいただけるのは大変ありがたいことです。

先ほどもお話ししましたが、こうしたやり取りを通じて、普段から公園利用者の方とコミュニケーションを取ることの大切さを強く感じています。

〈「自然とそうしたくなる居場所」が公園〉

■田島さんの考える、園地、公園、ランドスケープについて、目指していることや、理想のイメージを教えてください。

■冒頭でもお話ししましたが、現在は新しく公園や公園施設を造る時代というよりも、既存の公園をいかに丁寧に維持管理していくかが重要な時代だと感じています。

私は、時代に合わせて変えていく場所や、最先端の技術・考え方を取り入れる場所と、あえて変えずに残していく場所とを自分なりに考えながら、園地管理に取り組んでいます。

また、公園利用者の目線に立つと、毎日利用される方と遠方から訪れる方とでは、公園に求めるものや思いは異なりますし、故郷を離れて久しぶりに帰省した際に訪れる方、自分が子どもの頃に親に連れてきてもらった公園に、今度は自分の子どもを連れてくる方など、利用者の背景は本当にさまざまだと思います。

確かに、公園を全面的にリニューアルするという考え方もあると思います。ただ、例えば夜のヒマワリのライトアップのように、公園が持つ普遍的な魅力や変わらない価値を大切にしながら、新たな取り組みを取り入れていくことが、とても重要だと感じています。

私は、そうした多様な利用者の視点を意識しながら、人にとって「懐かしさ」や「安心感」、そして「新しさ」を感じられる空間であり続けることを大切にしたいですし、それこそが公園のあるべき姿だと思っています。

また、公園での過ごし方に目を向けると、ふらっと訪れて本を読んだり、芝生にレジャーシートを広げてくつろいだりと、「自然とそうしたくなる居場所」であることが、公園の理想なのではないかと感じています。

〈「想いを形に」する仕事ができる幸せ。日々勉強する。常に意識を高く持つ。〉

■今回のインタビューで何か伝えたいこと、特に若い方へ向けたメッセージをお願いします。

■はい。公園管理を仕事としているのは、世の中では少数かと思っています。若い方には、まずこのような仕事があることも広く知って頂きたいと思います。

行政の方からは、公園の仕事を経験しても、異動により他の分野の仕事に就くことが多い、とお伺いしています、公園に特化した仕事ができるのは自分にとっては本当に魅力的で、お客様ともダイ



空も広い、羽生水郷公園

レクトに話せますし、頂いたご意見をすぐに現場にフィードバックしたり、もちろん自分の業務の範囲内ではありますが、考えて工夫したことがすぐに現場に形として反映できる仕事、つまり「想いを形にする」仕事ができ本当に幸せだと感じています。大学進学もそうですが、もしやりたいことや興味がある分野があればその道に邁進して頂きたいと思います。

また、これは以前、上司から教わった言葉なのですが、私自身もこれから「日々勉強する・常に意識を高く持つ」姿勢を忘れずに、仕事に向き合っていきたいと考えています。

■今日はお忙しい中、楽しいお話、ありがとうございました。

■こちらこそ、ありがとうございました。

*****聞き手、編集：埼玉県指定景観整備機構 都市づくりNPO さいたま 細田 隆
監修：埼玉県都市整備部都市計画課

田島 拓朗（たじま たくろう）

東京農業大学地域環境科学部造園科学科卒業。

2016年、公益財団法人 埼玉県公園緑地協会に入社。

川越公園、智光山公園、本部技術部での勤務を経て、
2024年より羽生水郷公園に配属。

大規模な花修景の企画・施工管理や、樹木病虫害対策など、公園緑地の維持管理業務を中心に携わる。

常日頃から、利用者の安心・安全と景観性の両立を意識し、時代や利用ニーズに応じた公園づくりに取り組んでいる。



・公益財団法人 埼玉県公園緑地協会 羽生水郷公園（さいたま水族館）

[羽生水郷公園（さいたま水族館） | 公益財団法人埼玉県公園緑地協会](#)

・埼玉県都市整備部公園スタジアム課 [公園スタジアム課 - 埼玉県](#)